

があり、史実にも、その解釈にも諸説がありますので、先に申し上げました通り、ご自分の心のフィルターで十分濾過され、取捨していただきたいと存じます。

この国民的作家が、「日本人は第一級の歴史をつくってきたと思う。だが、日本の歴史の中で、魔法にかけられ、日本が『魔法の森』になってしまった、いびつな時代がある。」と指摘しました。

では、唐突ですが、ここで質問です。さて、日本が「魔法の森」になってしまった時代とはいつでしょう？

史実とフィクション（虚構）の世界が融合した司馬遼太郎の歴史観、いわゆる「司馬史観」の凄さや魅力の一端がうかがえると思いますので、氏の著書から五つのヒントを差し上げます。

第一ヒント「司馬遼太郎自身が、井原西鶴や松尾芭蕉、紫式部、清少納言とやら話ができそうだが、この時代に活躍した人たちは話を通ずるかどうかわからないと思っただ時代です。」

第二ヒント「確かなリアリズムを有し、自分の国と人民を大切にした織田信長なら考えもしないことをやった時代です。」

第三ヒント「実感の乏しい、空疎な言葉による、全部嘘と言っている情報が流布され、言葉に対する不信感を根づかせた時代です。」

第四ヒント「自分の出世や功名に多くの関心があり、国というものを博打場の賭けの対象にするような、滑稽な意味での勇ましい人間が愛国心を気取っていた時代です。」

第五ヒント「発想された政策、戦略、あるいは国内の締めつけなどが全部変で、誇大妄想のような野望を世界に向かって展開し、骨董品のような兵器で世界の国々を相手に戦争をした時代です。」

答えは……、そうです、昭和元年（大正末年）から昭和20年の敗戦までの20年間です。——満州事変、五・一五事件、国際連盟脱退、二・二六事件、日中戦争、治安維持法・国家総動員法、ノモンハン事件、太平洋戦争の時代です。

昭和18年、学徒出陣で戦車兵となった司馬遼太郎は、敵の上陸に備えるため、敗戦の半年ほど前、満州から連隊ごと日本に戻りました。そして、22歳のとき、栃木県佐野市で敗戦を迎えました。

敗戦を知った司馬遼太郎は、まず、「なんとくだらない戦争をしてきたのか。」と思っただけです。そして、「なんとくだらないことをいろいろしてきた国に生まれたのだろうか。いったい日本とは何だろう。」という思いが、後に日本史への関心になったのだそうです。

さらに、司馬遼太郎は、「この異様な時代が古典化することは恐ろしい。」とも述べています。大きな失敗ととらえず、「クレーム社会」よろしく他国や世界情勢に非を求め、巧妙に正当化し、日本の輝かしい歴史であるかのように美化されることを案じたのでしよう。

程度の差こそあれ多くの方が、このような古典化によって、日本が「魔法の森」に逆戻りしないか、という心配を抱いていると思われませんが、司馬遼太郎は、その心配をはっきりと否定しています。

「もう一度、満州事変や太平洋戦争の時代に帰ることはないだろうと思います。われわれは一度、自由というものを知ったわけです。もうひとつ、明治憲法国家をゆがめ、『魔法の森』にしたのは、統帥権（条文の拡大解釈によって、軍の参謀本部が握っていた、立法、行政、司法の三権を超越した権能）という魔法の杖であることを知ったわけです。歴史は繰り返すと言いますが、歴史というものは、ある条件によって成立しますので、われわれは今後きつといい方向に向くと思いません。ただ、この『昭和』を忘れてはいけません。」と。

そして、これからの日本人は、「真心」を世界の人々に対して持つとともに、自分自身に対しても持たなければいけない、と説いています。

司馬遼太郎没後、20年以上経ちますが、これらの「司馬語録」の滋養は不変であり、これからも日本の還るべき原点であり続けることでしょう。

「真心」とは、私利私欲や邪念を捨てた、嘘偽りのない誠実な心です。

その意味を何度も噛みしめていますと、教育の充実及び振興を任務とする文部科学省の組織的な天下りや悪質な隠蔽工作などの違法行為をはじめ、大人社会で嘆かわしい出来事が相次いでいる今日、子どもが、大人に何よりも強く、切実に求めているものは、まさに「真心」ではないか、という思いに至りました。

不誠実で、我欲と保身に汲々とした大人は、子どもの「人間としての基本的な欲求」の充足にも無責任で、大人社会の縮図である学校教育の場にも悪しき影響を及ぼしているからです。

未だにつまらぬ我欲や邪念に振り回されているような者が申し上げるのは如何なものかと自問しつつ、平成29年度「立科教育」の出版に当たって、臆面も無く申し上げます。

大人が「真心」を持ちましょう、子どもに求める前に……。

◎参考図書 「昭和」という国家 司馬遼太郎著

日本放送出版協会発行 ほか